1 自己評価及び外部評価結果

(ユニット名グループホームライフケア黒森)

事業所番号	0690800297		
法人名	社会福祉法人 正覚会		
事業所名	グループホームライフケア黒森		
所在地	山形県酒田市黒森字葎葉山54番10		
自己評価作成日	令和6年11月17日	開設年月日	令和26年4月1日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

ご利用者が「心地よい感覚」を持ち、生活できるよう支えていくことをコンセプトの中の一つに掲げ、ご利用者に心地よい感覚を持って頂けるように、認知症緩和ケアの取り組みとして「学習療法」を取り入れており、現在はご希望のあるご利用者を対象に提供しています。また、ご利用者と職員が協力しながら畑作りを行い、自分達で野菜を育て収穫することで楽しみや昔の事を思い出し、水やりなどの役割を持った生活を送っています。ご利用者の身体機能の維持・低下予防とご利用者間の仲間意識の構築や精神的な面での安定を図る目的として「リズム体操」と「口腔体操(バタカラ体操)」、機能訓練を行っています。また、令和4年度より認知症の進行緩和や運動機能の向上、便通にも効果があると言われている高齢者の水分摂取量について一日1500ccと目標を掲げて取り組んでおります。ICT機器も積極的に導入し、ベッドセンサーバイタルビーツによってデータを収集し、質の良い眠りをサポートしております。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

1ユニット9名の利用者と固定化された職員が一家族のように暮らし、事業所が力を入れている利用者の「学習療法」と「機能訓練」は職員とマンツーマンで一人ひとりの状態に合わせて取り組み、継続することで認知症の進行緩和や運動機能の向上などの成果を上げています。毎年実施している「ご利用者及びご家族意向・満足度調査」は結果を公表して意見・要望は真摯に受け止め、できる事はすぐ対応してサービスの質向上に繋がっています。法人は敷地内に併設しているデイサービスから特別養護老人ホームまで切れ目のないサービスを提供しており、今後も利用者は介護度・身体状況に合わせて不安なく支援を受けることが可能であり、家族等からも安心を得ている事業所です。

※事業所の基本情報は、公表センターページで検索し、閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 <http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/>

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人エール・フォーユー		
所在地	山形県山形市小白川町二丁目3番31号		
訪問調査日	令和7年1月29日	評価結果決定日	令和7年2月12日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

山形県地域密着型サービス「1 自己評価及び外部評価(結果)」

※複数ユニットがある場合、外部評価結果は1ユニット目の評価結果票にのみ記載します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1		○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事務所内の数箇所に事業所コンセプトを掲示し、全職員の視覚に届く様にしている。週1回、申し送りの時間にコンセプトの唱和を行っている。また、会議等でコンセプトの共有や判断に困ったときの判断基準となることを説明し実践につなげている。		
2		○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	新型コロナウイルス感染症予防のため、近隣の小中学校や地域の行事への参加ができない状態が続いているが、年に1回地域交流会という行事を通し、普段お世話になっている地域の方や学校、保育園に近況のお手紙とお花をお渡しし、関係作りを継続している。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	今年度も、地域包括支援センターかわみなみ主催の家族介護者教室において、「認知症の対応について」という内容で地域の方々に認知症の人の理解や支援方法、施設の認知症ケアに関する取り組みを情報発信する機会を設けている。※令和7年1月18日実施予定。		
4		○運営推進会議を活かした取組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回の会議を有効に活用し、事業計画や実績報告や活動内容を報告し、委員からの意見を頂きながら運営に活かしている。		
5		○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議での情報提供や運営に関し疑問点がある場合は、市町村担当者に電話や直接出向き指導を受けたり、案内文書等は電子メールでのやり取りを行っている。		
6	(1)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、環境や利用者の状態を考慮しながら、玄関に鍵をかけない工夫や、身体拘束をしないで過ごせるような工夫に取り組んでいる	法人全体内部の身体拘束内部研修を開催し、身体拘束をすることで起きる弊害等の理解に努めている。また、毎月開催している運営会議で、法人全体の身体拘束に関する状況を把握している。施設はしているが、外へ行く機会は都度設けている。	身体拘束検討委員会や運営会議を法人合同で定期的で開催して協議・検討している。職員は内部研修で指針の読み合わせや何が身体拘束に当たるか具体的な例を上げて学習している。外出希望がある利用者には併設の法人内で連携して見守り、夜間は全員がセンサーにより睡眠状態を把握するシステムを活用して安全な暮らしに繋げている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7	(2)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	年度当初に全法人職員に対し高齢者虐待防止法等についての研修を開催しており、理解を深め日々の介護に活かしている。また、そのような事案のニュース等があった際には、なぜ発生してしまうのか、原因を職員間で情報共有し、虐待防止に努めている。また、令和4年6月24日より、虐待防止委員会を設置。管理者が委員となっており、委員会での決定事項等を所員に伝達している。	身体拘束検討委員会と同日に開催し、職員研修も合同で行われ全体で虐待防止に取り組んでいる。言葉遣いなど不適切なケアと思われた場合は職員同士その場で注意し合い、年1回の職員健康診断でストレスチェックも行い、管理者は職員の日頃の心身状態にも配慮している。	
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるように支援している	年度当初に全法人職員に対し制度についての研修会が開催されており、理解を深め日々の介護に活かしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	今年度は新規入所なし。加算等の改定の際は、事業に関する説明や質問のやり取りを行い、ご家族に納得して頂いた上で、重要事項説明書及び契約書の説明・同意・契約している。		
10	(3)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者・ご家族から直接お話を聞きしたり、年に1回、「ご利用者・意向満足度調査」アンケートを実施しサービスの質の向上に努めている。またその結果をご家族にも公表している。	家族等との面会は共有スペースで人数・時間を決めて可能となって喜ばれ、定期的に事業所発行の「おたより」を送付し、写真や担当職員からのコメントで利用者の様子を知らせている。毎年、満足度調査を行い結果を公表し、意見・要望についてできる事はすぐ対応している。	
11		○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者と職員が最低でも年2回個人面談する機会があり、意見や提案を聞くことができている。また定期的に事業所会議（月1回）を開催しており、意見を反映させている。		
12	(4)	○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人内で人事考課制を導入し、自己評価による一次考課と役職職員による二次考課の総合評価を基に上層部と面談する機会がある。	職員の勤務状況の評価は法人の上層部による人事評価システムを導入している。ライフスタイルに合わせて法人内異動も可能であり、シフト希望・有給休暇取得・急な勤務交代などは職員同士で協力し合い、働きやすい職場環境となっている。「学習療法」と「水分飲水量」は担当者を決めて年間を通してデータ記録し、役割を持つことで意欲・向上に繋がっている。	
13	(5)	○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内でキャリアパス制度を取り入れ、経験年数に応じた研修プログラムを実行している。外部研修に関しては年度中に予定している。	法人は「自ら考え、判断し、行動できる職員」育成を目的とし、外部・内部研修を年間計画しており、職員は対象となる項目を受講している。職員は事業所コンセプトを基にした個人目標をたてて管理者と面談して評価・アドバイスを受けたり、また資格取得にも意欲的に挑戦している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	山形県認知症高齢者グループホーム連絡協議会へ入会している。→令和6年度庄内ブロック総会に出席する。また、酒田市サービス事業者連絡協議会「地域密着型サービス事業所部会」にも所属しており、各種研修会や他施設との情報交換を行っている。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居者と管理者が事前にお会いし、本人の状況や要望等を情報収集し、良好な関係づくりに努めている。また入居前に24H事前聞き取り表の記載をご家族に依頼することで、入居後も本人の生活リズムが継続できるよう努めている。※今年度は新規入所はおりません。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族と管理者が事前にお会いし、ご家族から不安な事・要望等を十分にアセスメントし、必要な支援方法を共に考え介護計画を作成している。また、入所前に24時間事前聞き取り表の記載に関する目的を説明し、協力を頂く事で、ご家族が安心出来るような関係作りにも努めている。※今年度は新規入所はおりません。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	的確なアセスメントを行い、ご利用者とご家族がその時必要としている支援について、職員間で密な情報共有を行っている。支援方法や相談の内容によっては法人内外の他サービスや多職種連携に努めている。※今年度は新規入所はおりません。		
18	(6)	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入所以前の生活が継続できるよう、ひとり一人が得意なこと・役割を意識した支援をしている。毎日の配膳を役割としている方、洗濯物干しや乾いた衣類を手際よくたたまれる方等、ご自分ができることをすすんで下さっている。苦手なことは得意な方が一緒に声をかけて行っており、職員・ご利用者同士が共に支え合いながら生活されている。	利用者の「学習療法」と「機能訓練」は職員とマンツーマンで一人ひとりの希望や状態に合わせて取り組み、認知症の進行緩和や運動機能の向上などの成果を上げている。「おらいの畑」菜園は利用者が主体となって栽培し、収穫した野菜は皆で食して楽しみ、また、外気に触れる事で気分転換にもなっている。	
19		○本人を共に支え合う家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族対応の通院やオムツ類など必要物品の持参依頼時はご利用者の状況を報告し共有を図っている。また、年4回発行のおたよりを通じて行事やグループホームでの生活の様子をご家族と共有し信頼関係の構築に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(7)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	同法人を利用されている親戚や友人がいる場合は関係が途切れないように継続して会いに行けるよう努めている。	感染予防対策で降りない花見ドライブに出かけ、家族等との通院・自宅への外出、毎月の出勤弁当・誕生会など日常生活の中にメリハリのある行事を継続して行い、利用者には喜ばれている。以前は保育園や学校との地域交流会を対面で行っていたが、現在は職員がおたよりと花を届けて関係性が途切れないようにしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ご利用者一人ひとりの性格を理解し、ご利用者同士が協力出来るように居間の席配置を工夫し、職員も輪に入り役割を促しお願いしている。また、意思疎通が不自由なご利用者に対しても、職員が間に入り他のご利用者との関わり合いを持てるように支援することで孤立する事なく生活できている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	グループホームを退居され、同法人内の他事業所に入所されたご利用者、家族に対しあいさつや会話等を通してこれまでの関係性を大切にしている。また、同法人内で終末期を迎えたご利用者の経過を把握し、亡くなられた際にはお見送りをしている。 ※今年度は退居された方はおりません。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23		○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の会話や学習療法のコミュニケーションを通して、ご利用者の思いを汲み取っている。また、意向の確認が困難な場合は、ご利用者の日々の行動、既往歴や生活歴、ご家族等からの思いや暮らし方の希望、意向の聞き取りをしている。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご利用者ご本人からだけでなく、ご家族・利用していたサービス提供先より生活歴や習慣・趣味等の情報をお聞きし、これまでの暮らしの把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	ご利用者の現状を把握し、その都度アセスメント表・ケアプランの更新を行っている。また、週に一度バイタル測定・月に1回体重測定を行い、パソコン・口頭での申し送りをすることで、職員間で情報を共有し把握に努めている。 また、認知症の進行緩和や運動機能向上にも効果があると言われていた高齢者の水分飲水量について一日の目標を1500ccと掲げ、取り組みを継続している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(8)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護計画については、月に1回担当職員が計画の進捗状況を確認している。 また、入居者及び関係者との連携の中で必要となればサービス担当者会議を開催し、介護計画の見直しができるようにしている。	利用者の思いを優先に家族等・主治医・職員の意見を取り入れた介護計画を作成し、家族等に説明して同意を得ている。職員による毎日のケアプランチェック・毎月のモニタリング(観察)・年1回のアセスメント(情報収集)更新が定期的に詳細に行われ、見直しに繋がっている。	
27	(9)	○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別記録は日常的に介護記録ソフトを使用し、入力を行っている。ボイスレコーダーやタブレットを使用した申し送りをし、職員全員が情報共有できるようにしている。	すべての記録はタブレット・パソコンに入力しており、職員は出勤時にプリントした介護日誌に目を通してから業務に就いている。午後の対面での申し送り時には特記事項などを情報共有してケアの統一を図り、週1回は事業所コンセプトを唱和し実践に向けての共通意識を確認している。	
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われず、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	グループホームを入居される前の状況に対して柔軟に対応している。独居の方の場合は定期的に自宅へ行き荷物などを持ってきたり、仏壇の管理などをされている。また、主治医への定期通院に関しても、施設に近い内科医を紹介している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	現在は、新型コロナウイルス感染症予防により地域との関わりが持てないのが現状である。以前入居されていた方は社会福祉協議会にて、ご利用者の権利擁護や金銭管理支援等で個別ケースにて関わりがある方がいた。		
30		○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、かかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医と連携を図りながら、職員付き添いにて月に1度定期通院を行っている。また、以前より通っている医院へはご家族の無理のない範囲で通院へ行って頂き、その際にご利用者の状態報告などを電話連絡だけでなく書面にてお知らせし連携を図っている。		
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職員と連携し、週に一度のバイタル測定や月に一度の体重測定を行ないご利用者の状態把握に努め、ご利用者が適切に医療を受けられるよう情報提供を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32	(10)	○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、入院治療が必要な可能性が生じた場合は、協力医療機関を含めた病院関係者との関係づくりを行っている	ご家族や協力医療機関と情報交換を行い、入院した際は地域医療室と連携を図り、入院中や退院前には面会を行う。ご利用者の状態把握を行い、退院後の生活について考えていくよう努めている。 ※今年度は入院された方はおりません。	状態が安定している利用者が多く、現在入院中の方はいないが、主治医の判断で入院となった場合は家族等・地域医療室と情報交換しながら退院に向けて支援している。退院後については法人内の移動も含めて情報提供して家族等と話し合っている。	
33	(11)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、医療関係者等と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した際は、ご家族に同法人内の事業所等も検討していただき、入所までの期間は多職種連携を図りながら本人の生活を支援していく。	利用者が歩行困難で車いす使用となった、入浴の際に浴槽を跨ぐことができなくなった、食事で嚥下や自力摂取が困難になったなど、機能低下により共同生活が困難となった場合を重度化と捉え、家族等と今後の方針について話し合い希望に沿えるよう支援している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	入職時に職員全員が、消防署による普通救命講習を受講している。また、法人内にて3年未満の職員を対象に危険予想訓練研修を行っており、ご利用者急変時や事故発生時に備えて、急変マニュアルを作成し、速やかな対応が出来るよう努めている。		
35	(12)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防計画に従って、避難訓練を年2回行っている。内1回は昼間想定、もう1回は夜間想定で同フロアの小規模特養と合同で実施している。地域との合同訓練は新型コロナウイルス感染症予防のため実施できていないが、福祉用具の使用方法、留意点の情報共有と把握を行っている。	隣接する小規模特別養護老人ホームと合同で火災避難訓練を実施し、歩行不安のある利用者に対して車いすを使用する対応や居室に避難確認済カードを掲示するなどの具体的な確認や、職員の通報訓練も実施している。BCP(業務継続計画)に基づき食糧備蓄は法人全体で、備品は事業所で管理保管し有事に備えている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(13)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員倫理規定を定め、年度当初に全職員を対象とした、尊厳やプライバシーについて研修を行っており、日々の業務での個々の言葉かけについて、振り返り対応している。また、メディアに取り上げられたことなどをミーティング等で情報共有しながら、職員間で意見交換を行っている。	年度始めに接遇研修を実施し、声掛けや対応などを振り返り、申し送りの場で気づきや注意を促し人格を尊重した関わりについて日々確認している。利用者の気持ちを大切に考え、自己決定しやすいよう言葉掛けや伝え方を工夫し、さりげないケアの対応を心掛けている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	コミュニケーションを通して、表情や言葉等を観察し、ご利用者の思いを聞きながら自己決定しやすいような問いかけをしている。セレクトのおやつでは、おやつ写真を見てご自分が好きなおやつを選び自己決定できるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38	(14)	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一日の過ごし方として、食事や入浴の時間帯は基準としているものがあるが、その日の体調や気分・希望に合わせて時間の調節を行っている。思いや希望をお聞きし、本人のペースに合わせて過ごし方となるよう状況に応じた支援をしている。	利用者の意向に沿って、起床時間、入浴の曜日や時間、行事への参加なども無理強いせず柔軟に個別対応している。趣味で絵を描く方にはファイルにまとめて作品集にしたり、畑作業が得意な方には収穫までを一緒に行い、利用者が望む暮らし方ができるよう支援している。	
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節の変わり目等にはご家族の協力を得ながら服装に配慮しており、衣替えの際には担当職員とコミュニケーションを図りながら、一緒に行っている。ご家族・本人より毛染めの希望がある方がおり、ご家族より毛染めを持参して頂き入浴時に定期的に毛染めを行っている。 散髪に関しては、地域の理容室より来所していただき本人の希望を聞きながら対応している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	新型コロナウイルス感染症予防の為、ご利用者が盛り付けを行ってはいないが、食器の下膳やコップ洗い等を行っている。又、毎食前に咀嚼や嚥下機能維持し安全においしく食事が出来るよう口腔体操を行っている。口腔体操を職員とご利用者一緒に行う事で嚥下機能維持のみならず、安心感と心の安定を図っている。その他、行事の際、郷土食を料理を作り、ご利用者から聞きながら調理したり、各月でお楽しみ弁当を発注したり、誕生月の際には担当職員がケーキを購入し誕生日会を開催するなどして楽しく食事ができるよう工夫している。	法人内の厨房から配食を受け、朝夕食の炊飯は事業所で行い、利用者と一緒に盛り付けをしている。郷土食を味わう行事では、利用者に聞きながら一緒に調理したり、畑で収穫した野菜を使ったおやつ作りや季節感のある月1回の出前弁当は楽しみとなっている。利用者の誕生日には、ホールケーキを準備し家庭的な祝い方で喜ばれている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	同法人内に管理栄養士も配置されており、栄養面を考慮された献立となっている。その中で嚥下状態等のご利用者本人の状態や嗜好に合わせ食事を提供している。一日の水分量の目安を立て、それに近づける様、本人の今までの生活習慣を情報収集し、声かけを工夫している。		
42	(16)	○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	ひとり一人に合った口腔ケア用品を準備し、毎食後の口腔ケアの声かけ、促しを行っている。又、必要に応じて職員がブラッシングの支援している。口腔内に異常があった場合は、ご家族に連絡し、かかりつけ医への通院依頼や歯科の往診対応も可能となっている。	法人内の歯科衛生士より、利用者にあった口腔ケア用品の選定や口腔状態に関して助言を受けながら口腔内の清潔保持に努めている。毎食後に各居室の洗面台で歯磨きし、支援が必要な方には仕上げ磨きしている。夜間帯は、管理が難しい方の義歯を預かり洗浄保管している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(17)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	日々の生活記録やホワイトボードの活用、口頭での申し送りにて排泄パターンの把握を行っている。可能な限りトイレでの排泄が継続できるよう、使用する物品の検討も適宜行っている。	各居室にトイレがあり、安全やプライバシーに配慮した個別ケアをしている。一人ひとりの排泄パターンの把握や排泄予測支援機器の活用により誘導を促し、トイレでの自立排泄や失敗の軽減に向けて支援している。利用者に合った排泄用品で快適に過ごせるよう常に見直し検討している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	1日分の水分量の目安(1500cc)を立て水分摂取できるよう声掛けや体を動かしている。また、1人ひとりの排泄パターンに応じて、排便が見られなかった際は、医師より処方された薬の服薬等をし排便コントロールを行っている。		
45		○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、事業所の都合だけで曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	入浴は入浴表に沿って行っているが、ご利用者の希望や状態に応じて入浴日をずらすなど臨機応変に対応し、入浴していただけるようになっている。また、家庭用浴槽が難しいご利用者には、法人内の事業所でリフト浴や機械浴も対応できるよう、職員間で情報共有している。		
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	生活習慣(起床・就寝・食後の休憩等)や、その時の本人の体調や状況に合わせて、休息の声掛けを行い対応している。また、夜間帯は、本人に確認しながら部屋の明るさに配慮し、使い慣れた寝具等でゆっくり過ごして頂けるよう支援している。		
47	(18)	○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	ご家族対応の通院は、内服薬の継続や変更の確認をしている。内服薬変更時には、職員間で口頭・パソコンにて申し送りを行い、処方箋で目的や副作用、症状の変化の確認に努めている。また、処方箋については職員がいつでも確認できるように、ファイルにまとめて保管している。	配薬は看護職員が行い、遅番職員がダブルチェックし、服薬介助後は空き袋を確認することで誤薬防止に努めている。薬の変更や状態観察の必要性について、口頭やパソコン上の申し送り欄で確認し症状の変化等を詳細に記録して看護職員や医療機関と連携が図れるようにしている。	
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	ご利用者、ご家族より聞き取りし収集した情報を基に、入所以前の生活に合わせた支援をしている。趣味や、得意な事を継続できることで、生活への張り合いや喜び・楽しみとなるようにしている。畑は継続して行っている。運動会の開催、紫陽花や紅葉の時期の外出支援等、季節に合わせた行事や外出の機会を設け、気分転換が図られるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49		○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	新型コロナウイルス感染症予防の為、外出ができない状況が続いていたが、感染症対策を行いながら、車から降りずに車内からでも楽しめるように季節に見合った花見ドライブなどを実施している。行事のみだけでなく、日常的に市内のドライブなども行うことでご利用者の気分転換を図っている。		
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご家族に説明をし、理解を得て小遣い金を頂き、金庫にて保管している。(今年度より施設長室の金庫に保管している。)ご利用者から希望が聞かれた際には、ご家族へ相談しご利用者の小遣い金で購入してよい物は、職員と一緒に買い物に行き購入している。現在は新型コロナウイルス感染予防対策で、ご利用者と一緒に買い物はできないが、担当職員が代わりに行っている。また、毎月小遣い帳にて出納を管理し、ご家族にお知らせしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご家族様より電話連絡があった際には、希望が聞かれた場合に電話を変わるなどしてご家族とご利用者がやり取りできるように支援している。また、家族に電話してほしいとの要望がご利用者から聞かれた場合にはこちらからご家族へ電話連絡を行い、ご利用者とご家族がやり取りできるように支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅のようにくつろげる心地よい空間を心がけ、居間に季節にあった掲示物をご利用者と職員とが一緒に作成したり、施設周辺の散歩に出かけた際には、季節の草花を摘んで来て施設内に飾ったりして、季節を感じていただけるようにしている。また、グループホーム敷地内の畑に作物を植え、ご利用者よりアドバイスをいただきながら、一緒に水やりや収穫を行い季節感を感じられるように工夫している。デッキテラスには花を植え、常にご利用者の目に入るようにしている。	対面式のキッチンと食堂が一体的な造りで、居心地のよい家庭的な雰囲気となっている。デッキテラスがあり明るく開放的で、暖かい季節には外に出て花を眺めて気分転換することもある。四季を感じてもらえるよう、今の季節に合った創作物を掲示するなどの工夫もしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ご利用者同士の相性や本人の希望に合わせた食席となるよう配慮している。テーブル席の他にソファとテーブルを配置したくつろげるスペースを設けており、お好きな場所で過ごして頂けるよう工夫している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時にご家族へ説明し理解と協力を求めており、実際に使い慣れた枕や毛布、椅子、テレビ、ラジオなど自宅で馴染みのある物を持ち込み、自宅に近い環境で過ごして頂けるよう努めている。	入口には木製の表札が掛けてあり、室内にはトイレや洗面台、ベッド、チェスト、クローゼットが備え付けてある。自宅からはテレビや写真など馴染みあるものが持ち込まれ、衣替えの時期には家族等が交換分の衣類を運んでいる。夜間帯はセンサーにより睡眠状態を把握するシステムを活用し、状況に合わせたケアや見守りを行い安全に過ごせるように配慮している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	各居室への表札設置の他に、目が見えにくいご利用者の為に居室扉にもお名前を書いた紙を貼るなどして自室の認識が出来るように配慮している。また、自室の場所やトイレの場所等、ご利用者一人ひとりに合わせた職員の声掛けを統一することでご利用者が混乱しにくいように工夫している。		